

2023 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
経営学部 地域ビジネス学科	教授	伊藤 恵美子
最終学歴	学 位	専門分野
名古屋大学大学院国際開発研究科博士後期課程修了	博士 (学術)	日本語教育学

I 教育活動

○理念・目標・方針・計画

(理念)

自律的に行動できる学生の育成

(目標)

受講生一人ひとりが受講開始時より確実に学力が向上し、人間的にも成長して校訓「真面目」が自律的に行え、「オンリーワンを、一人に、ひとつ。」になるよう指導する。

(方針)

周囲に目配りしながら自主的に動ける人間、ルールを遵守して仕事が任せられる責任感のある人間に成長するよう、対等な大人として日々学生に接する。

(計画)

教職員の心構え「子弟を教育するは、私事に非ず。天に事うるの職分なり」を常に念頭に置き、近年学力の二極化が顕著な本学の実情に勘案して、長期休暇中の指導を含めて個々の学生に必要な指導の見直しを不断に行っていく。

○担当科目（前期・後期）

(前期)

日本語表現Ⅰ、アカデミック・ライティング、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

(後期)

日本語表現Ⅱ、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ

○教育方法の実践

日本語表現Ⅰ・Ⅱで現代日本語文法と語彙を復習してから、アカデミック・ライティングで大学生に求められる客観的な文章を実際に取り書き、総合演習で新聞から現代社会の課題を探り、専門演習Ⅰ・Ⅱで活字資料を批判的に読み、春期休暇に日本語表現Ⅰ・Ⅱ未履修者に補習授業を促す段階を経て、専門演習Ⅲ・Ⅳで「卒業研究ノート」を活用して卒業研究を完成させた。入学から卒業まで一貫してアカデミックスキルを養うことを通して教育活動の目標に導いた。

○作成した教科書・教材

なし

○自己評価

卒業研究の指導内容と教育効果を論文「卒業研究の教育的効果：その軌跡を学生の意欲から分析して」としてまとめ、教育実践を研究に繋げた。

Ⅱ 研究活動

○研究課題

- (1) 応用言語学の課題「第二言語教育のコミュニケーション能力の育成」(究極課題)
- (2) 大学教育の課題「アカデミックスキルの養成」(継続課題)

○目標・計画

(目標)

「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」に基づく分類が見直され、2023 年 5 月より日本国内も with コロナになり、学会活動も制約が減ずる兆しが見られるので、周辺分野の最新動向を可能な限り把握する。

(計画)

- (1) アイデンティティの確立を促す。
- (2) アカデミック・ライティングに関して収集したデータを分析してまとめる。

○2016 年 4 月から 2024 年 3 月の研究業績 (特許等を含む)

(著書)

なし

(学術論文)

- ・伊藤恵美子「卒業研究の教育的効果：その軌跡を学生の意欲から分析して」愛知東邦大学『東邦学誌』、第 52 巻第 1 号、2023 年 6 月、33-46 頁
- ・伊藤恵美子「アカデミック・ライティングに向けて：ビブリオバトル導入の試み」愛知東邦大学『東邦学誌』、第 46 巻第 1 号、2017 年 6 月、81-95 頁
- ・伊藤恵美子「「台湾人」という意識：若者のアイデンティティはどこから来たのか？どこへ行くのか？」愛知東邦大学『東邦学誌』、第 45 巻第 1 号、2016 年 6 月、79-89 頁

(学会発表)

なし

(特許)

なし

(その他)

- ・伊藤恵美子「コミュニケーション能力の萌芽：言語習得を幼児の母語習得の側面から」愛知東邦大学『東邦学誌』、第 46 巻第 2 号、2017 年 12 月、169-176 頁

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況 (学内外)

なし

○所属学会

日本語教育学会会員、社会言語科学会会員、留学生教育学会会員、日本コミュニケーション学会会員

○自己評価

上述のように、2019 年度入学生が日本語表現Ⅰ・Ⅱ（義務教育の復習）、アカデミック・ライティング（レポート作成）、総合演習Ⅰ・Ⅱ（現代社会の課題探求）、専門演習Ⅰ・Ⅱ（活字資料の読解）を経て、専門演習Ⅲ・Ⅳで卒業研究を行い、大学生らしい知的営みを終えて学び舎を飛び立った。その過程を分析した「卒業研究の教育的効果：その軌跡を学生の意欲から分析して」を論文としてまとめることができたので、研究課題として掲げている「アカデミックスキルの養成」は一定の成果を収め、中央教育審議会で重視されている教育と研究を両輪とする大学の在り方に沿うものとなった。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

(目標)

2023 年 4 月 19 日付「2023 年度学務分掌」に基づき、研究活動委員会副委員長、及び研究倫理委員会委員長の命を受けたので、本学の研究活動が盛んになるよう努める。

(計画)

2023 年 3 月 15 日付「2023 年度学務分掌」で決定していた研究活動委員会・研究倫理委員会委員長の降板を受けて急遽重責を担うことになったので、職務を全うできるよう取り組む。

○学内委員等

研究活動委員会（副委員長）、研究倫理委員会（委員長）

○自己評価

研究活動委員会では鶴飼学長の下、微力ながら副委員長を務めた。研究倫理委員会では、学長のお力添えをいただきながら各委員の忌憚ない意見を尊重して委員会を司った。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

(目標)

大学教員として科学的研究を進め、研究成果を広く社会に還元する。(継続目標)

(計画)

所属学会の論文査読等を通して後進の育成に力を尽くし、学術の発展に貢献する。(継続計画)

○学会活動等

所属学会の論文査読等を通して後進の育成に力を尽くし、学術の発展に貢献する。(継続計画)

○地域連携・社会貢献等

地域連携には該当せず

○自己評価

日本語教育学会学会誌『日本語教育』の査読に 2009 年から携わり、2013 年に学会誌委員会委員の主査（世界で 30 人）に就任し、世界中から投稿される論文の査読を行っている。2023 年からは審査・運営協力員として、今後の学術の発展、及び日本語教育学の研究促進を世界最高レベルで担っており、大学教員として社会貢献を十分に果たしている。学会活動は、広告のような商業ベースと異なり、高等教育機関としてあるべき本来のアカデミックな側面であり、中堅大学を目指す本学の知名度向上に貢献するものとして、高く評価できよう。

Ⅴ その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

クレド「人間としての尊厳を持ち、前へ進む」を携え、建学の精神「真に信頼して事を任せよう
る人格の育成」に向けて、学生が課題達成に向けて協力して取り組み、互いに貢献できるよう
指導を重ね、教育と研究をリンクした。

Ⅵ 総括

新型コロナウイルス感染症の緊張感は依然としてあるものの、教育活動・研究活動はコロナ以前
に回復しつつある。大学運営・社会貢献は例年どおり粛々に行った。